思春期の抑うつ感とその描画特徴についての研究
―動的学校画と子ども版自己記入式抑うつ尺度を用いて―

学芸学部　心理学科　橋本　秀美
社会福祉法人　つむぎ福祉会　小林三千緒

要旨：抑うつ傾向にある児童生徒は増加しているが、抑うつ状態が放置されると、深刻な社会的不適応・ひきこもりなど二次的な問題が生じる危険性もあり、早期に気づく必要がある。しかし、思春期の子どもは自己の内面をなかなか語らないことも多く、不安定な心の状態を捉えにくい。本研究では、臨床場面や学校や家庭で子どもの抑うつ感を早期にキャッチし対応できる方法を検討したい。そこで、Birleson（1981）の子ども版自己記入式抑うつ尺度（DSRS−C）の日本語版（村田ら,1996）を用いて、子どもの抑うつ感を測定し、さらに、動的学校画（KSD）を用いて、子どもの抑うつ感と描画特徴との関連を検討した。関西圏の A 中学校の 1 年生 210 名（男子 104 名、女子 106 名）を対象に、子ども版自己記入式抑うつ尺度（DSRS−C）と動的学校画（KSD）を施行した。その結果、抑うつ感の高いものは自己像を小さく描くこと、友達の行為について何もしていないなどの友達像を描くこと、悲哀感の高いものは、自己像と先生像との距離を近くに描き、友達像との距離を近くに描かないこと、全体的に統合性に欠ける絵を描くことなどが示された。今後は、動的家族画（KFD）なども合わせて用いることで、さらに多様な側面から検討したいと考えている。

キーワード：思春期、抑うつ感、DSRS−C、動的学校画（KSD）、二次障害

Ⅰ　問題

近年の疫学調査によると調査対象の 2.6％がうつ病とされ（うち小学生 1.6％・中学生 4.6％）、その中で、高い抑うつ傾向を示している小学生は 7.8％・中学生は 22.8％という結果が示されている（傳田，2005）。筆者らは、子どもの抑うつ感について、以下のように問題を捉えている。第 1 に身体的症状や行動がクローズアップされ、抑うつ感に気づけないという問題がある。子ども、特に児童期の場合、自己の内面の言語化が難しく（中根，1990）、頭痛・腹痛・不眠などの身体症状や不登校という行動等で出現しやすく、その背後にある抑うつ症状が見逃されやすいという点がある。加えて「子どもに大人と同じうつが存在するはずはない」という先入観があることも抑うつ症状が見逃されやすい原因となり（傳田，2004）、より問題が深刻になっていると思われる。第 2 に厚生労働省などの調査から毎年多くのひきこもりやニートの人数が報告されているが、彼らの精神的背景にも抑うつ傾向が存在すると考えられる（奥山，2007）。社会の一員として貢献できない苦しさは、本人だけでなく周囲の人や家族をも困惑させていると予想され、社会・経済的な点からも大きな損失になっていると思われる。第 3 に文化的背景の問題も挙げられる。不適応症状の現われ方にも国によって違いが見られ、日本の子どもは抑うつの気分を訴えることが少なく、好きなことも楽しめず何事も億劫で集中力や気力がでないという主症状が、日本の子どもの抑うつ感の現われ方であり、その気持ちを我慢して相手に知られないようにする傾向がある（傳田，2004）。これは控えめな態度を美徳とする日本文化の影響であると思われ、「やる気が出ないのは怠けているだけであり、根性が足りないからだ」という精神論が未だ根強い中では、その背景にある抑うつ症状は見逃されがちである。このような、周囲の大人たちの認識の下では、子どもの心情は、「自分が悪い・自身の頑張りが足りないだけだ」と自分を追い込むことになってしまいこの悪循環は心身のエネルギーを益々枯渇させ自己効力感や自己肯定感を低下させることになりかねない。第 4 に発達課題阻害の問題が挙げられる。思春期は、Erikson, E. H（1959）の発達理論でいうとアイデンティティ確立の試みを始める時期といえる。個人差はあるが、通常、児童期後期・思春期は精神的な自我の目覚めの中で自己に目を向け、これか

らの自分の生き方についても模索を始める。また家族からの離脱、社会における意思的・自立的な成人の役割をとるための準備段階（村本，1989）として非常に大切な時期である。その時に抑うつ症状のために発達危機に陥る危険性もあり、早く子どもの不調に気づかねばならない。第5に、注意欠陥多動性障害やアスペルガー症候群などの発達障害の子どもたちの二次障害として抑うつ感があらわれることも多く報告されている（友久，2005）。このような子どもたちは、日頃から褒め言葉よりも批判や叱られる言葉のほうを浴びせられることが多く（内山・水野・吉田，2002）、また周囲のものとの関係がうまくいかないことから、低い自己評価や劣等感、無力感を抱えることによって、不適応症状があらわれることもあるため、早急な対応が求められている。第6に社会システムの急速な変化や学校・家庭・地域の機能不全の問題が考えられる。学歴重視の弊害が指摘されながら、依然として学校は知識偏重に傾き人格教育が置き去りになっている印象は否めない。また核家族化により周囲の人たちのサポートが得にくい状況もあり、厚生白書（平成8年度版）によれば、我が国では子どもが大きくなるに従って「子どもを育てるのは楽しいと感じる」ものの割合が小さくなるという結果も出ている。虐待など子どもにとって特に深刻な状況がなくても何となく居心地が悪く心理的に窮屈な思いをもつ家庭の問題は大いに子どもの抑うつ症状発症の要因の一つになっていることも予想される。

Ⅱ　目的と方法

我が国では、子どもの抑うつ感についての研究は少なく、既存のものも疫学的な調査がほとんどである。また、国内外を問わず、成人を対象とした病因論研究は数多くあるが、子どもに関するものは非常に少なく（武田，2002）、また、子どもの抑うつ感を考える立場はさまざまであり、なかには発達的な観点から、子どもの抑うつの存在を否定する考え方もあった（Rie, 1966）。しかし、不登校やいじめ問題とも関連し、学校生活の中で消極的になったり、不適応反応で落ち込んでしまう子ども達を抑うつという視点から検討することが必要だとする指摘も少なくなく（村田ら，1989）、子どもの抑うつをとりあげる研究が増えつつある。堀ら（2001）によれば、気分の落ち込みは、誰もが日常生活の中で経験するものであり、そのレベルが健常か病的な範囲かの判断は難しく、臨床的な介入が必要なレベルの抑うつ状態であっても、本人も周囲も“単なる気分の落ち込み”として捉えることが多く、治療への導入が遅れがちになるとしている。さらに子どもの場合、そのことの自覚は難しいと思われる。そのためにも、早期に抑うつ状態を把握することで、社会適応上の問題の解決への一助になると考える。抑うつ状態の測定のため広く使われている尺度として Beck, A. T. のベック抑うつ尺度（Beck Depression Inventory：BDI）と Zung, W. W. K の自己評価式抑うつ性尺度（Self−Rating Depression Scale：SDS）があり、両尺度とも最近1週間での抑うつ気分や興味や喜びの喪失、自己評価の低下、不眠といった代表的なうつ病の症状を尋ねており、BDI は 21 項目、SDS は 20 項目でともに4件法の選択肢を有するものである。その他、他者評価尺度も含めると抑うつに関する尺度は様々に開発されているが、本研究では Birleson（1981）が考案した全 18 項目からなる子ども版自己記入式抑うつ尺度（Depression Self−Rating Scale for Children, 以下 DSRS−C と記す）の日本語版（村田ら，1996）を使用する。このような質問紙による尺度測定の他に、子どもの抑うつ感を知る方法を持つことにより、今後の臨床場面や学校現場で、例えばスクールカウンセリング場面において児童生徒のアセスメントの指標として、また子どもに関わる大人が比較的容易に子どもの不適応のサインに気づくことにより、子ども達への早期対応にも役立つことが期待できると考える。

以上のような背景から、本研究では子どもの抑うつ感を早期にキャッチする方法を検討したいと考えた。これまでに筆者らは、描画を通して子どもの共感性や様々な心理状態や心理特性を知る方法を研究してきた（橋本，2004，2005a，2005b，2009）。そこで本研究では抑うつ感と描画特徴の関連を検討することにより子どもの抑うつへの予防や早期対応に有用となると考える。

描画法とは、描かれた絵から描画者の心の状態を理解しようとするための心理テストや心理療法のことを指す。描画には描画者自身の内的世界が投影され（日比，1986）、描画を丁寧に読み解くことで描画者の内面の一端に触れることができることから、教育、福祉、医療などの臨床現場で広く活用されている。以下、描画法の変遷について、橋本（2009）より引用し参考に述べる。1926 年に Goodenough, F. L. が人物画による知能の測定法を発案し、人物画による知能検査が発展した。これは描かれた人物の部分を、目、口、鼻、眉、耳、顔の輪郭、首、胴体、腕、手、指、足などについて検討し、どの程度正確に描かれているのかを測

定するものである。後に、Goodenough の人物画テストは 1963 年に Harris, D. B. により改訂され、他にも標準知能テストとの関係を検討した多くの研究が報告される。また Machover はパーソナリティの測定・評価としての人物画検査法を発展させ、1949 年には「人物像描画におけるパーソナリティの投影」を発表した。発達的なアセスメントとしての人物描画の研究において Koppitz、Kellogg、Di Leo の 3 大大家による研究が大きな役割を果たした。また、1 枚の用紙に描画者の家族全員の姿を描く家族描画法（Drawing A Family：DAF）が 1952 年に Hulse によって、家族成員間の葛藤の考察のために用いられた。1970 年に Burns＆Kaufman が DAF に動的な要素を加味した動的家族画法（Kinetic Family Drawing, 以下 KFD と記す)を確立した。それまでの静的な描画に力動性が加わることで KFD には質量ともに得られる情報量が増えた。さらに、KFD とは異なる学校での対人関係や学校生活での様子を知る目的で Prout & Philips（1974）により動的学校画（Kinetic School Drawing, 以下 KSD と記す）が開発された。なお KFD に KSD をシステムとして用いる方法を Knoff & Prout (1985) が発表している。

研究 1

1. 調査方法

関西圏の A 中学校の 1 年生 6 クラス計 210 名（男子 104 名、女子 106 名）を対象に、子ども版自己記入式抑うつ尺度（DSRS−C）と動的学校画（KSD）を施行した（うち有効回答数男子 95 名、女子 101 名、計 196 名)。調査の実施にあたっては、抑うつ感を測定する尺度には、デリケートな内容を含む質問項目があることや、絵を描いてもらうことなどから、学校では管理職や運営委員会等の了解や、学校を通して PTA などへの事前の了解を得てもらい、その上で十分に倫理に配慮して実施した。

2. 調査用紙の構成

DSRS−C は、各項目につき、「いつもそうだ・ときどきそうだ・そんなことはない」の 3 段階（付表 1 参照）に、0 点・1 点・2 点と評定し、全てスコアされると 36 点が付けられ、16 点以上が抑うつ感が高いとして評価される質問紙である。質問項目が分かり易く、項目数も 18 項目と比較的少なく実施が容易であることなどから、近年児童の抑うつ感を測るツールとして使用されているものである。適用年齢も 7 歳から 13 歳とされているため（Birleson, 1981）思春期の抑うつ感を測る尺度として適切と考えて採用した。KSD は、A4 サイズの一枚の用紙に自己像と友達像と先生像を含めた学校の絵を描いてもらうものであり、「この用紙に学校で何かをしている絵を描いてください。その絵には、自分、自分の先生を 1 人、友だちを描くようにしてください。友達は何人描いてもかまいません。これについても、マンガや棒のような人物はいけません。人物全体を描くようにしてください。」と教示した。なお描画終了後の質問（Post Drawing Inquiry：PDI）には、集団実施用にあらかじめオリジナルに作成した質問紙に回答を求めた。KSD の評価基準は、客観的スコア基準（橋本, 2009）の項目を参考に、人物像の大きさや人物像の向きなど 17 項目を選択した。項目は抑うつ感との関連が示唆されると思われる項目を主に選択し、評定は筆者らと専門家 1 名の計 3 名により行った。表 1 に評定内容と評定基準を示す。

表 1　描画特徴の評定内容および評定基準

①人物像の大きさ	:描かれた人物(自己像, 先生像, 友達像)の大きさをmm単位で測定。
②自己像−先生像	:自己像の頭頂部と先生像の頭頂部とを結ぶ直線距離をmm単位で測定。
③自己像−友達像	:自己像の頭頂部と一番近い友達像の頭頂部とを結ぶ直線距離をmm単位で測定。
④友達の人数	:描かれている友達の人数。
⑤描画の順序	:それぞれの人物像を描いた順序。
⑥包囲	:一人かそれ以上の像を縄跳びや机などの取り巻く線によって囲んでいる。
⑦区分	:個々を意識的に故意に強く分離させている。
⑧上部又は下部の線	:特定の個人上部に沿った線や紙面の下部に線を引いたり斜交平行線の陰影をつける。
⑨人物像の顔の向き	:描かれた人物の顔の向きを調べる。
⑩人物像の表情	:描かれた人物の表情を調べる。
⑪自己像の欠如	:自己像が描かれていないもの。
⑫自己像のみ	:自己像しか描かれていないもの。
⑬自己像の位置	:自己像の描かれている位置。
⑭大きさの比較	:一番大きく描いた像を調べる。
⑮最上部の人物	:紙面の一番上に描かれている人物。
⑯人物像の行為	:それぞれの人物像の行為。
⑰統合性の欠如	:人物像の相互作用から統合を欠いている。(誰も他の者の方を向いていない。お互いに後ろ向きや横向きの像など, バラバラの行為・動作をしている様子)

研究 2

（描画事例）

描かれた絵（KSD）の中から、研究 1 の結果から、抑うつ感と描画特徴に明らかな関連が見られたものについて、描画事例としてとりあげる。

Ⅲ　結果と考察

研究 1

DSRS−C 全 18 項目に対して主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、因子負荷量が .350 を下回った 6 項目「2. とても良く眠れる」「6. おなかが痛くなることがある」「9. いじめられても自分でやめてと言える」「14. こわい夢をみる」「16. 落ち込んでいてもすぐに元気になれる」「18. とても退屈な気がする」を除き、再度主因子法・プロマックス回転により因子分析を行い 2 因子を抽出し、これは永井(2008)を支持する結果となった。第 1 因子を 7 項目から構成される「活動性の低下および楽しみの減退」、第 2 因子は 5 項目から構成される「悲哀感」と命名し、2 つの下位尺度項目の平均値を算出したところ「活動性の低下および楽しみの減退」（平均＝4.53, *SD*＝2.68)、「悲哀感」（平均＝1.84, *SD*＝2.1）であった。次に因子分析の結果を踏まえて内的整合性について検討するため α 係数を算出したところ、「活動性の低下および楽しみの減退」α＝.76、「悲哀感」α＝.78 と十分な値が得られた。表 2 にプロマックス回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を、表 3 に下位尺度の平均値と標準偏差をそれぞれ示す。

表 2　DSRS-C の因子分析結果
（プロマックス回転後の因子パターン）（n＝196）

		Ⅰ	Ⅱ
7.	元気いっぱいだ*	.73	−.01
12.	いつものように何をしても楽しい*	.73	.00
1.	楽しみにしていることがたくさんある*	.69	−.17
8.	食事が楽しい*	.46	.13
11.	やろうと思ったことがうまくできる*	.46	.04
13.	家族と話すのが好きだ*	.43	.11
4.	遊びに出かけるのが好きだ*	.39	.05
17.	とても悲しい気がする	.02	.78
3.	泣きたいような気がする	−.05	.70
5.	逃げ出したい気がする	.10	.62
15.	独りぼっちの気がする	−.05	.61
10.	生きていても仕方がないと思う	.04	.52
	因子間相関		
	Ⅰ	—	.41
	Ⅱ	.41	—

（*　逆転項目）

表 3　下位尺度間相関と平均値、標準偏差

	活動性の低下および楽しみの減退	悲哀感	平均	*SD*
活動性の低下および楽しみの減退	—	.35**	4.53	2.68
悲哀感		—	1.84	2.1

** *p* <.05

評定基準（表 1）に基づき描画を評定したのち、それぞれの評定内容により DSRS−C の下位尺度得点の平均値の差を検討するため一要因分散分析と t 検定を行った。その結果、「活動性の低下および楽しみの減退」因子に、自己像の大きさ（$F(3,173)=3.15, p<.05$）による平均値の差がみられた。なお自己像の大きさは①極小（30mm 以下）②小（31mm 以上 50mm 以下）③中（51mm 以上 70mm 以下）④大（71mm 以上）の 4 段階に分類して分析した。自己像の大きさについて Tukey の HSD による多重比較の結果、自己像を 30mm 以下に小さく描いたものと 31mm 以上 50mm 以下で描いたものとの間の平均値に差が見られた（$p<.05$)。表 4 に『自己像の大きさにより 4 群化した群ごとの「活動性の低下および楽しみの減退」下位尺度得点の平均値と S.D』を示す。また「活動性の低下および楽しみの減退」因子に、友達像の行為（$F(2,174)=3.38$, $p<.05$）による平均値の差がみられた。友達像の行為については、Tukey の HSD による多重比較の結果、友達の行為について「ぼーっと立っている」という無為な様子を描いているものの方が、勉強している・クラブ活動に参加している・遊んでいるといった日常的な学校場面での活動的な行為を描いているものよりも、下位尺度得点の平均値が高かった（$p<.05$)。表 5 に『友達の行為により 3 群化した群ごとの「活動性の低下および楽しみの減退」下位尺度得点の平均値と S.D.』を示す。

さらに「悲哀感」因子に、自己像と先生像との距離による平均値の差がみられた（$F(3,149)=4.24$, $p<.05$)。自己像と先生の距離は 50mm 間隔になるように①距離極近（50mm 以下)、②距離近（51mm 以上 100mm 以下)、③距離中（101mm 以上 150mm 以下)、④距離遠（151mm 以上）の 4 段階に分類して分析した。自己像と先生像との距離を近く（50mm 以下）描く群と、適度に離して描く群（51mm 以上 70mm 以下）との間に有意な差がみられた。表 6 に『自己像と先生像の距離により 4 群化した群ごとの「悲哀感」下位尺度得点の平均値と S.D.』を示す。

その他、人物像の大きさの比較（$F(2,185)=3.06$,

表 4　自己像の大きさにより 4 群化した群ごとの「活動性の低下および楽しみの減退」下位尺度得点の平均値と S.D.

自己像	極小	小	中	大	$F(3,173)$	p
人数	31	51	51	44	3.15	<.05
平均値（S.D.）	5.23（2.75）	3.63（2.53）	4.57（2.25）	5.00（3.10）		
多重比較の結果（Tukey のHSD）	⟷				（⟷ : p <.05）	

表 5　友達の行為により 3 群化した群ごとの「活動性の低下および楽しみの減退」下位尺度得点の平均値と S.D.

友達の行為	日常的に学校で見られる行為	立っている	日常的に学校で見られない行為	$F(2,174)$	p
人数	143	29	5	3.38	<.05
平均値（S.D.）	4.3（2.48）	5.69（3.54）	4.00（1.58）		
多重比較の結果（Tukey のHSD）	⟷			（⟷ : p <.05）	

表 6　自己像と先生像の距離により 4 群化した群ごとの「悲哀感」下位尺度得点の平均値と S.D.

自己像と先生像との距離	距離極近	距離近	距離中	距離遠	$F(3,149)$	p
人数	61	59	23	10	4.24	<.05
平均値（S.D.）	2.24（2.36）	1.24（1.65）	1.65（1.56）	2.8（2.97）		
多重比較の結果（Tukey のHSD）	⟷				（⟷ : p <.05）	

$p<.05$)，自己像の表情（$F(2,193)=4.97$，$p<.05$)、統合性の欠如（$t=2.21$，$df=40.79$，$p<.05$）による平均値に有意な差がみられた。

以上の結果から、精神的な活動性やエネルギーが低下し楽しみの減退した心理状態が、自己評価の低下や自己表現の回避につながり、小さく描かれた自己像に投影されていると考えられる（表 4)。さらに、活動性の低下によって友達との心理的交流を回避しがちになり、具体的な活動の描写の回避につながったのかもしれない（表 5)。また、「悲哀感」と自己像と先生像との距離について、一般的に思春期の子どもたちは学校の先生や親などの大人よりも同世代の友人に対して親和的になる傾向がある中で、「悲哀感」の高い者は、自己像を同年齢の友達像からは距離をとり、先生像に近づけて描くということが推察されよう。

次に、自己像の大きさと描画の統合性と下位尺度との関係を調べるため、自己像の大きさを①極小（30mm 以下)、②小（31mm 以上 50mm 以下)、③中（51mm

表７　自己像の大きさと統合性の程度により８群化した群ごとの「悲哀感」
下位尺度得点の平均値と S.D.

**p <.01　*p <.05

自己像の大きさ	極小		小		中		大	
統合性	統合的	非統合的	統合的	非統合的	統合的	非統合的	統合的	非統合的
人数	23	8	46	5	42	9	36	8
平均値	.91	3.75	1.65	2.00	1.69	1.11	1.75	3.88
(S.D.)	(1.31)	(2.82)	(1.70)	(2.12)	(2.18)	(.93)	(2.09)	(2.95)

	主効果		
	自己像の大きさ	統合性	交互作用
悲哀感	2.61	8.49**	4.13**

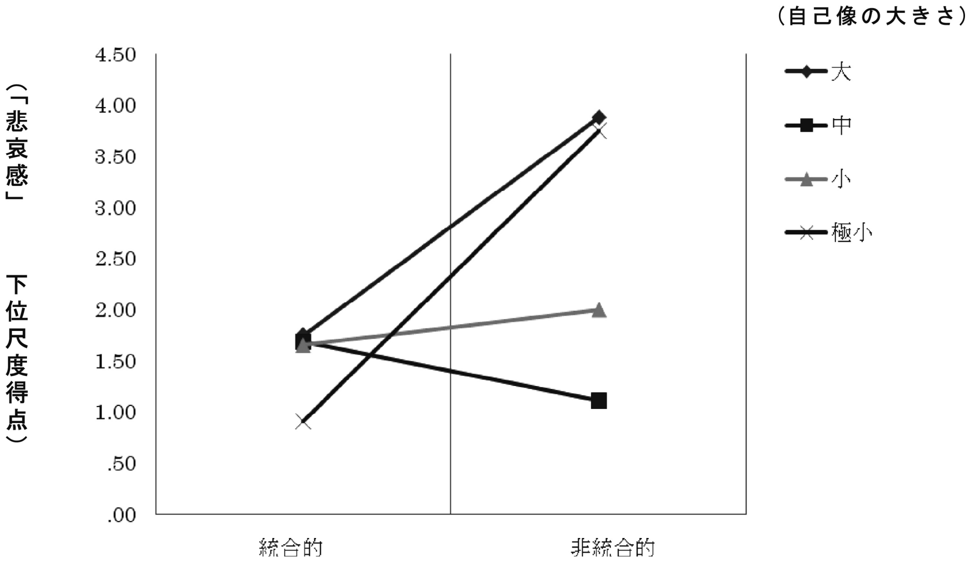

図１　自己像の大きさと統合性の程度により８群化した群ごとの「悲哀感」下位尺度得点の平均値

以上 70mm 以下）、④大（71mm 以上）の４つに分類しその大きさと描画の統合性の評価項目を独立変数に DSRS−C の下位尺度「活動性の低下および楽しみの減退」と「悲哀感」の平均値を従属変数とした 2×4 の分散分析を行った。その結果を表７と図１に示す。

分散分析の結果、「活動性の低下および楽しみの減退」については有意な差がみられなかったが、「悲哀感」について有意な交互作用がみられた（F(3,169)＝4.13, p＜.01)。「悲哀感」について交互作用が有意だったことから単純主効果の検定を行った結果、「悲哀感」との関連について、自己像の大きさにおいては、自己像を小さく（30mm 以下）描いた群と大きく（71mm 以上）描いた群における単純主効果がともに１％水準で有意であった。さらに、統合性の項目においては、非統合的な絵を描いた群に、自己像の大きさの単純主効果が５％水準で有意であった。以上の結果から、「悲哀感」を感じているものは、自己像を非常に小さくもしくは大きく描き、描かれた人物像が各々バラバラの行為をしていたり、お互いの交流がみられない全体的にまとまりに欠ける絵を描く傾向がみられ、「悲哀感」を感じていないものは、自己像の大きさに関係なくまとまりのある統合性のある絵を描くことが伺えた。

分析の結果から、抑うつ感の高い者の描く絵は自己像が小さいという特徴がみられた。エネルギーの低下は抑うつ感の中核症状であり、自尊心や自己評価が低くなっていることにより、自分自身が投影されるといわれる自己像を小さく描くと考えられる。また、抑うつ傾向が高くなることは、何事に対しても億劫になり

がちであり、対人関係においても消極的になったりまた回避しがちになり、描画全体から他者との疎通性が感じられるようなまとまりのある絵が描けないのかもしれない。自己像には自分自身が投影され、大きな自己像と自己肯定感の高さとの関連が推察されることから、自己像の大きさは、抑うつ感を読み取る１つの指標になるといえよう。内容分析から客観的な評価には難しい部分もあるが、描画の中の人物間の相互関係が希薄でまとまりの欠如した非統合的な描画と、「抑うつ感」との関連が示唆された。

研究 2

（描画事例）

研究１の結果から、抑うつ感と描画特徴に明らかな関連が見られたものについて、実際の描画から特徴的なものを選んで、以下に、描画事例としてとりあげる。

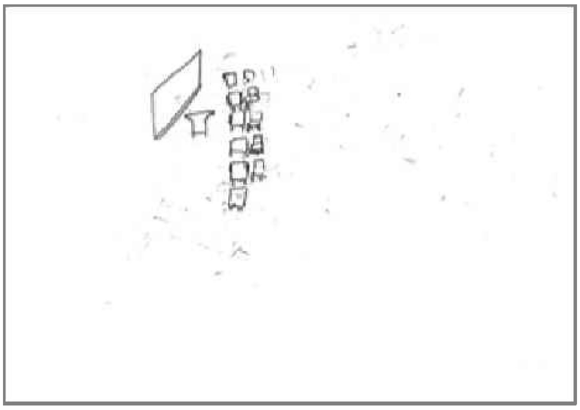

図 2　人物像が描かれていない描画
（DSRS−C スコア 23 点）

図 2 は、通常、教室内にある黒板・教卓・机等のアイテムのみが描かれている。自己像は省略され、その他の人物像も描かれていない。抑うつ得点の高いものが小さい自己像を描くという、抑うつ感と描画特徴の関連を示す描画である。筆圧も弱くエネルギー水準の低下も伺われる。PDI についても、行為については誰の行為も回答されておらず、抑うつ感の高さと小さい自己像との関連が、また、エネルギーが低く、人との交流を回避した描画表現からは抑うつ感の投影が伺われ、小さな自己像の究極の表現ともいえる自己像の省略との関連がみられ、研究１の結果を示唆する描画例である。

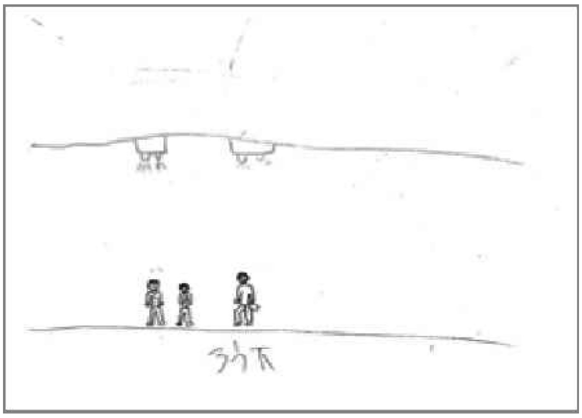

図 3　小さな自己像と上部下部の線が描かれた描画
（DSRS−C スコア 17 点）

図 3 は、抑うつ得点の高い描画者の描画である。人物像が小さく、付加物は天井と廊下と天井につけられた照明だけであり、“ろう下“と書かれている。人物像の上部の線と下部の線が描かれていて、両線に挟まれた圧迫感も感じられる。上部下部の線は不安感が強い場合に、その不安感を解消するために強い土台を必要とされる場合にみられる（日比，1986）こと、また「上部の線」は激しい不安を意味し「下部の線」は不安定感やそれを解消するために工夫し崩壊しかけた家族や強いストレス下にある子どもの描画にみられる（橋本，2009）ことなどから、抑うつ得点の高さからも、描画者の不安が抑うつ感と関連して表現されているとも推察される。“ろう下“の文字に、パーソナリティーの硬さが伺われる。また、照明のみが描かれていることから、明るさを求めるエネルギーの低さが、抑うつとの関連が伺われる。研究１の抑うつ感の高さと小さな自己像との関連を示す描画例である。

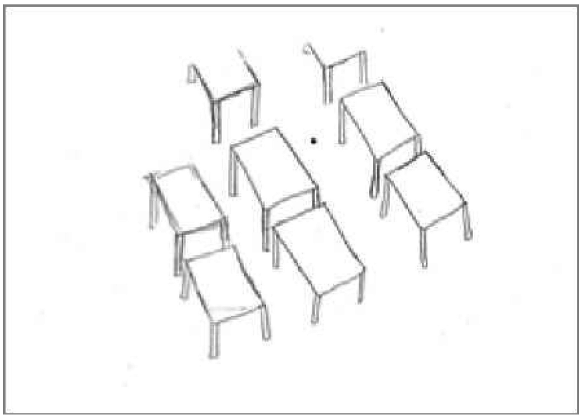

図 4　人物像が描かれていない描画
（DSRS−C スコア 22 点）

図 4 は、抑うつ得点の高い描画者の描画である。PDI には自分・先生・友だちを描いたと記述がある

が、紙面には机と黒い点のみしか描かれず、自己像だけでなく人物像は誰も描かれていない。鳥瞰図的な描写から、傍観者という立場で学校と自分自身との関係について距離をおいて捉えている心理状態や、防衛的・拒否的な印象などからも、抑うつ感が伺われる。抑うつ得点の高い結果や、エネルギーが低く、人との交流を回避した描画表現から、自己像の省略は小さな自己像表現とさらに強化された表現とも捉えられる。抑うつ感の高さと自己像の最小化という、研究１の結果を示唆する描画例である。

図５　友人像の行為が何もしていない描画統合性に欠ける描画表現（DSRS−C スコア 19 点）

図５は、抑うつ得点の高い描画者の描画である。描画者と友達とは別々に異なる行為をしており、さらに、正面を向いている自己像に対し、友達像は背を向けて横向きに描かれており、人物間の交流がみられないことからも、統合性や疎通性に欠ける表現でもある。PDI には、左側で机に腰掛けている自己像は「考え事をしている」、右側に描画者に背を向けて立っている友人像は、「ぼーっと遠方を見ている」とある。先生像について人物全体は描かれず、頭だけ描かれ、顔の部分は描かれていない輪郭のみの顔である。先生との交流や疎通性はみられず、葛藤的な表現でもある。抑うつ感の高さと、友達像の行為が何もしていない表現との関連が伺われる、研究１の結果を示唆する描画例である。

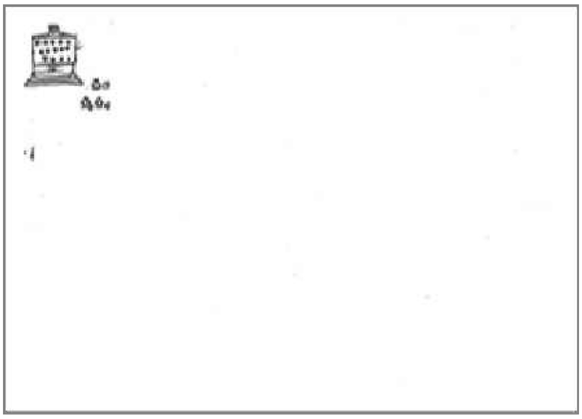

図６　小さな自己像、何もしない友達像（DSRS−C スコア 17 点）

図６は、抑うつ得点の高い描画者の描画である。左上に小さく描かれた校舎の下に、自分と友達と先生が描かれている。３人とも小さな人物像で、小さな自己像描写の絵である。さらに、PDI では、自分、友達、先生とも「ぼーっとしているところ」と回答されており、友達像の行為が何もしない描画表現の絵で、小さく背面に描かれた自己像や何もしない表現、受動性の領域でもある紙面の左上にすべてが小さく描かれている表現からは、委縮した抑うつ的な印象が伺われ、抑うつ得点の高さの投影かもしれない。描かれた順が、先生像→友達像→自己像の順であり、最後に背面で描かれた自己像からも自己否定感などが伺われ、下位尺度得点の悲哀感得点の高さとの関連も示唆される。抑うつ得点と、小さな自己像、何もしない友達像の行為の２つの関連を示す描画例である。

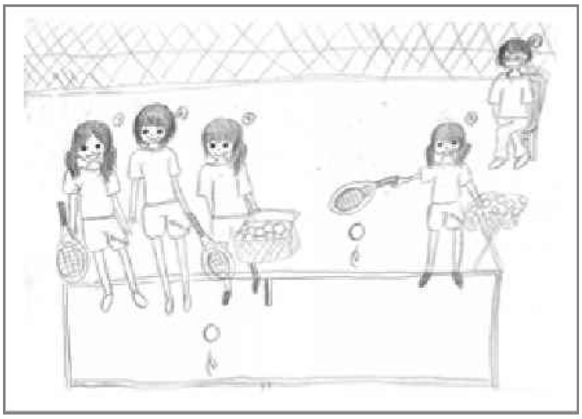

図７　自己像の大きさ、友人像の行為、自己像から先生像や友人像への距離、統合性や疎通性、ともに通常の描画（DSRS−C スコア　9 点）

図７は、自己像の大きさ、友人像の行為、自己像から先生像や友人像への距離、統合性や疎通性、ともに

通常の描画表現がなされている描画例である。抑うつ得点も 9 点と高くない。テニスの部活場面で、PDI では、部活しているところで、「先生は部活で声出ししてくれている」「友達は一緒に部活しているところ」と回答されている。さらに、描画後の感想として「早く部活に行きたいなあと思います。友達は描ききれなかったけれど他にもいっぱいいて楽しいです」と回答している。抑うつ尺度得点の低い者の健康的な印象の描画例である。

＊提示した図 2〜図 8 の描画については、研究方法で述べたように、倫理上の手続き等を経ている

Ⅳ　総合考察と今後の課題

本研究を通して、抑うつ感と描画特徴との関連が確認された。抑うつ感の高いものは、自己像を小さく描く傾向や、友人像について交流のない何もしない行為を描く傾向が示され、さらに、悲哀感の高い者は、自己像と先生像との距離を近く描くことや、友人像との距離を適度に離して描くことなどが、明らかになった。さらに、悲哀感の高い者は、描画全体のバランスや人物間の交流などの描画の統合性や疎通性のない描画特徴がみられることが明らかになった。さらに、小さく描いた自己像や極端に大きく描かれた自己像は、抑うつ感の指標の 1 つになり得ることが明らかになった。次に、本調査で実際に描かれた描画（KSD）には、研究 1 の結果が明らかに表現されているものがいくつかあり、研究 1 による統計的分析の結果を、実際の描画や描画法における臨床的知見として支持されることが示された。本研究では DSRS−C のスコアが 16 点以上だったものは全体の約 17%であった。サンプル数が少ない中ではあるが 2 割近くの子どもたちが何らかの抑うつ的な気分を抱えていることは、先行研究（傳田，2005）を支持する結果であり、さらに、実際の描画からも子ども達の抑うつ感についてのいくつかの重要なサインがみられた。今後、思春期の子どもの抑うつ感について、その予防や対処について重要な課題であることが確認された。

本研究を通して、抑うつ感といくつかの描画特徴との関連が明らかになった。本調査では描画法として KSD のみを使用したが、描画法について、KSD は KFD と合わせて用いることで社会場面としての学校場面の情報とともに、家族成員間の関係も知ることができ、より豊かな情報を得ることが可能になる（橋本，2004，2009）ことなどからも、今後は、システム法としての動的家族画（KFD）と合わせて用いるなど、さらに多様な側面から検討したいと考えている。また、他の尺度や投影法などの検討も重ねたい。

引用・参考文献

Birleson, P. 1981 The validity of depressive disorder in childhood and the development of a self−rating scale: A research report. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*. 22 73−88.

傳田健三　2005　子どものうつ病　−その心に何が起きているのか−　児童青年精神医学とその近接領域 46(3) 248−258.

傳田健三　2004　子どものうつ　心の叫び　講談社

Erikson, E. H. 1959 Psychological issues: identity and the life cycle. International University Press.

Goodenough, F. L. 1926 *Measurement of Intelligence by Drawings*. New York: World Book Company.

Harris, D. B. 1963 *Children's Drawings as Measures of Intellectual Maturing*. New York: Harcourt, Brace & World.

橋本秀美　2004　描画における共感性に関する臨床心理学的研究　風間書房

橋本秀美（2005a）. 肯定・否定感情に着目した共感性尺度の開発　心理臨床学研究，22，637−647.

橋本秀美（2005b）. 描画における人物像の顔の方向と共感性との関連　心理臨床学研究，23，412−421.

橋本秀美著　2009　高橋依子編　スクールカウンセリングに活かす描画法　−絵にみる子どもの心−　金子書房

Hulse, W. C. 1952 Childhood conflict expressed through family drawings. *Journal of Projective Techniques*, 16, 66−79.

日比裕泰　1986　動的家族画法（KFD）−家族画による人格理解−　ナカニシヤ出版

堀洋道・松井豊　2001　心理測定尺度集Ⅲ　心の健康を測る（適応・臨床）サイエンス社

ノフ、H. M.、プラウト、H. T.　加藤孝正・神戸誠（訳）2000　学校画・家族画ハンドブック金剛出版（Knoff, H. M. & Prout, H. T. 1985 *Kinetic Drawing System for Family and School*: A Handbook. Western Psychological Service.）

村田豊久・皿田洋子・堤龍喜ほか　1989　児童期・思春期の抑うつ状態に関する臨床的研究Ⅱ．CDI を用いての検討　厚生省

「精神・神経研究委託費」63 公−3　児童・思春期精神障害の成因及治療に関する研究　昭和 63 年度報告書　69−76　厚生省
村田豊久　1996　学校における子どものうつ病 −Birleson の小科児期うつ病スケールからの検討−最新医学 1　131−138.
村本由紀子　1989　アイデンティティ確立の発達段階の違いが社会的比較に及ぼす効果　社会心理学研究　4(1) 1−10.
中根允文　1990　うつ病：児童期・青年期を中心に　医師薬出版
永井智　2008　中学生における児童用抑うつ自己評価尺度（DSRS）の因子モデル及び標準データの検討　感情心理学研究　16(2) 133−140.
奥山眞紀子・氏家武・原田謙・山崎透　2007　こどものうつハンドブック−適切に見立て、援助するために　診断と治療社
Prout, H. T. & Phillips, P. D. 1974 A clinical note: The Kinetic School Drawing. *Psychology in the Schools* 11, 303−306.
Rie, H. E. 1966 Depression in childhood: A survey of some pertinent contributions. *Journal of American Academy of Child and Adolescent Psychiatry* 5 653−685.
武田洋子　2002　児童期抑うつの特徴に関する一考察：攻撃性を手がかりに　発達心理学研究　11(1) 1−11.
友久久雄編著　2005　特別支援教育のための発達障害入門 LD、ADHD、高機能自閉症　ミネルヴァ書房
内山登紀夫・水野薫・吉田友子　2002　高機能自閉症アスペルガー症候群入門　正しい理解と対応のために　中央法規出版

付表 1【DSRS−C】

わたしたちは、楽しい日ばかりではなく、ちょっとさみしい日も楽しくない日もあります。みなさんがこの一週間，どんな気持ちだったか当てはまるものに○をつけてください。良い答え悪い答えはありません。思ったとおりに答えてください。

1. 楽しみにしていることがたくさんある。
2. とてもよく眠れる。
3. 泣きたいような気がする。
4. 遊びに出かけるのが好きだ。
5. 逃げ出したいような気がする。
6. おなかが痛くなることがある。
7. 元気いっぱいだ。
8. 食事が楽しい。
9. いじめられても自分で「やめて」と言える。
10. 生きていても仕方がないと思う。
11. やろうと思ったことがうまくできる。
12. いつものように何をしても楽しい。
13. 家族と話すのが好きだ。
14. こわい夢をみる。
15. 独りぼっちの気がする。
16. 落ち込んでいてもすぐに元気になれる。
17. とても悲しい気がする。
18. とても退屈な気がする。

「Birleson's depression self−rating scale for children」
日本語版 DSRS（英）(1980)　DSRS−C
日本語版作成：村田豊久，清水亜紀，森陽二郎，大島洋子

An Association between Depressive Mood and Characteristics of Drawing among Students in Puberty
―by means of Children's Self−report Depressive Scale and Kinetic School Drawing―

Faculty of Liberal Arts Department of Psychology
Hidemi HASHIMOTO
Social welfare corporation Tsumugi Fukushikai
Michio KOBAYASHI

Abstract

The number of children and adolescents with depression has been increasing. Their secondary symptoms such as serious social maladjustment and hikikomori（social withdrawal）cause the therapeutic difficulty. Thus, to detect and treat depression at early stage is required. The drawing technique is one of the methods to discover the social maladjustment. In this research, we investigated whether the drawing technique was able to reveal depression at early stage among children and adolescents. We studied the correlation between the score of depression by means of a Japanese version of Depression Self−Rating Scale for Children（DSRS−C）and drawing characteristics analyzed by Kinetic School Drawing technique（KSD）. Totally 210 students（104 boys and 106 girls）in seventh grade in Kansai area were enrolled in this study and 196 valid samples（95 boys and 101 girls）were analyzed. The result demonstrated that the students with higher scores on DSRS−C tended to draw themselves in a smaller scale and their classmates in an inactive state. Among the students with sad feeling, while the distance between themselves and their teacher was shorter, the distance between themselves and classmates was longer. Therefore, the drawing technique is a useful tool for evaluation of depression among children and adolescents.

Keywords: adolescent, depression, DSRS−C, KSD, secondary symptom